◎◎◎佳作

別れた人へ

菅原友子
秋田県・一七・高校生

高校に入学した当時に、初めてあなたと声を交わしたことを思いだします。その時の笑顔がずっと忘れられなくて、あなただけ見るようになっていました。雨がパラついていたあの朝に、自転車置場であなたと出会えて、あなたの笑顔を一人じめに出来たことは、いつになっても忘れられないのです。あなたのバスケに熱中しているあの姿は、私の気持ちをただ確かめられているようでした。

六月のＨＲ合宿の日、あなたは言ってくれましたよね。私のことが好きだ……って。私は、嬉しいと感じる前に怖さを感じました。だって、二人の恋が初まる時には、終わりを悟らなければならなかったから……。わがままとあなたは笑うかもしれないけど、あなたの背中を見るたび、笑顔を見せられるたび、あなたが遠ざかっているようで……。そんな不安を抱いて、オドオドしているうち、あなたは、私の遠くへ、本当に手の届かない遠くへ行ってしまいましたよね。

別れを告げられた日、私、あなたの前で泣きませんでしたよね。強がってたのかもしれないけど、あなたを困らせたくなかったの。あなたと過ごした日々の私が、仕方ないよ……って、私に言ってくれたのだと思います。あなたを忘れることが、私にできる最後の、たった一つの思いやりだと、そう思いました。

そんな日々から、何日たっても私は心の奥底で、期待してました。もう一度、あなたが私の傍に戻ってきてくれると……。あの日に無理矢理とじ込めたあなたへの思いは、今の私には、どんなに小さな箱だとしても、重く切なさを増すばかりです。もう二度と交わることのない二人なのに、欲張りかもしれませんね。あなたと私の心が一つだったという事実は、どんなに時を重ねても消えないのですよね。この思いのすべてを、自信をもって語れる時、私は、もう一度あなたと会いたい。